

昔自多前白河の里に安珍と申は美しき僧
何れ心氣に付毎年一巡行の山へ去りて宿る
事那古の庄司清次と云卿士有口怨那古
那古と云所は住望の峠に田邊との間あり

初安珍多詣の折柄此庄司が家と年宿り
凡庄司の一人の娘有清姫と申は彼の安珍
清姫と申は我行くとあるたと妻ふ世人
と云又或年にも例年の如く庄司が家
泊る清姫安珍と申は初初何の僧様私
と云るを待せたりんや是非此度の事國
元く連綿とせ玉へやと云安珍も是非と云
下向を待玉へやと云清姫誠々思ひ大き
し喜びあり

初此時安珍は廿八の時清姫三々の時
初めて泊る事十三の時の事あり



或夜安珍清姫の臥室を
のぞきしるふ豈にうらや
みや

清姫の形も人も人間ふも
怒りしも愛の女あり
安珍ぶつり驚きを退
か後々々又清姫の
とこれを見れば別ふ
か

か後々々又清姫の
とこれを見れば別ふ
か



去程ふ安珍は清姫の容体をしるす
 何ぞとあまの心忍りしや何年偽りて
 逃帰る人物の心を極の清姫に向い
 今日、倒年の如く、怒り少く旅を
 や相又到来の通る路、國ノ多し、身
 を我國と連帰り申へべし下向の
 節を待ち玉へし云清姫是を
 こそ思ひ安珍の袂とす

さき乃世の契りの程を
 三怒の
 神の志多ぐいあや
 あかりん

此時安珍も是非

あかりん



三怒の神の

志多ぐいあや

高行まらぬもの

相安珍は又す程多し三怒神を
 釋れ帰る清姫の方へ立ちまら
 道とのて通すまら高の方へ

あかりん

清姫の安珍の心をききん今日

下向の日影あり早朝より待

程ふ安珍の帰りをうもす

あえけれを清姫も不審ふ

思ひ道だつこころ

待たふ折節

師礼の道志(道)

りのりこぬの

くやまじやめ

あまのの修験の僧ふ

市達いふ水玉んや

師礼の道志とて云ふ

さぬば其師傳の最りカミ

先く行ふが玉いしや云清姫

是をきくそをいふは然ら

又心をきくめよもや左折の事い

なまじや

女心のあり

まじや

袖をぬ

しつ又の

なまじや

待たふ





清姫は安珍のちや
 道をとくして遊歸り
 ちや云事しを誠や
 世に又も道をとく立
 たがぬるふいふ
 こころ通すすぢまふお遠ふやまうた人あり
 つのふしつもの心得や思ひ位來の人と又も侍居たり

墨衣を身か離し
 日高の方すまら僧
 あはさ幸しや喚やよめ
 ありつゝの修験の傍ふ
 ちがぬあれを
 旅僧の云其修験の所
 僧は旅子十三丁も先へ行
 すぢ玉しちや云清経是を
 きして初て了夢のさめたる心
 天を仰ぎ地は伏落り候は滝の如く
 暫くを正体もあつちが起道りて
 候とてゆび柄い
 安珍は提の所体



何やあを心得
 ありちや事の
 ありちが我を
 だます
 国へ帰りまふ
 ち遠ふや
 是へちや



たやう何處のそとにふらふら
 里までも追うけ飛うらんや
 雲べしや裾もあはれなるらん
 ちがひ日高をとりて追うけ
 忍ろーのりける事あはれ
 往來の人も清姫の気色を
 又そよふすまふと
 女うまや肝をつぶして
 追うける

又も清姫南都へついで
 名代の結ばるる
 思ふも名代の
 結ばれ

延喜親ひー甲斐もあ
 君をうらまひのかげく

控こやうの振舞をうらまひ

ちのりあはれ



おのり川を渡せむ

此程の雨降りしそそ水も

降り流りのぬれや人の

此身ごとくおのり川を渡れ

を流る共一念をう

いのちを過さず

聖人物や

立体王子を

拜一此世の

罪はまぬがれず衆

生来い必ずばゆけ

玉へや念トつ、難ふも

川を渡りある





立休王子宮

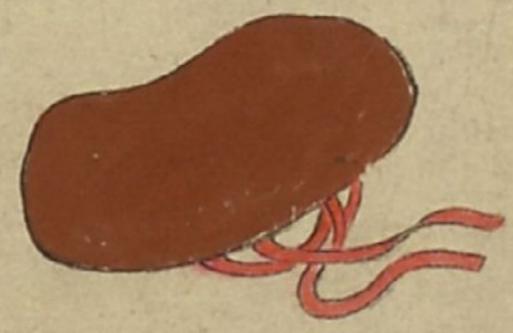
夫毒地をスルヲ女をスルヲ実ハ女ハ三寸の虫ハ思フヤ
果氏一念ニツマハ大地ヲスルヲ毒の毒ハ夜更の母昔
鶴子殺セ 田子 地ハスルヲなる田子スルヲ
一々の戯れスルヲ然ル我身の害ヲ起ル事
才一悔レノナクスルハ



丹安珍は清姫を偽りて
 道よりへてあげのびまが
 清姫の追のけり来るまに
 去るべ捕井村迫まり
 一ふ悔まゝこれのし
 由傳やう喚聲有り
 ふり返るるぬを
 是清姫まゝ口より息
 火端の如し清姫安珍を
 月のけりて飛のしんやん
 安珍こゝ叶つまや笑とす
 笠をとりて一生懸命

欲知過去因 欲知未来果
 見其現在果 見其現在因

一心不乱に唱ふぬを其印かき
 清姫は月も夕も是すまゝ
 後りのるふ腰打掛一息けり
 つらふもあきしりまふ安珍も
 又小里も逆のびた



夫より安珍の塩屋浦よりちすが
り高川ふきまらふ海をちち
置道成す近河のびちち

塩屋浦昔塩焼の所
如斯早ス



清姫又と母の如く安珍を遣う所
来々有様青く其地体やあつ口より
い火踏の如く日高川に渡りて
渡守に早くも世に死なせられ
傍り柳ふ衣舞を掲げ掛



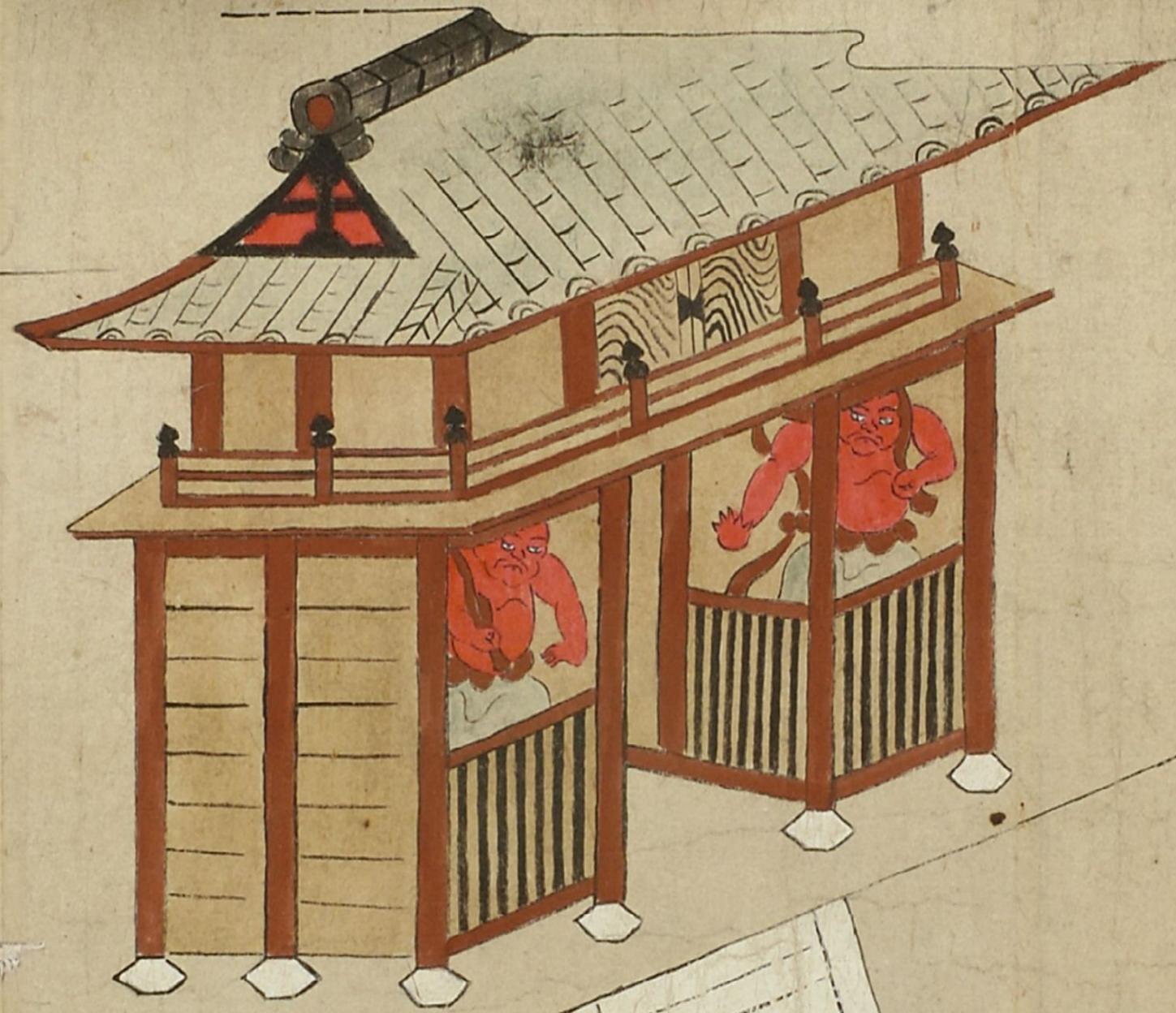


日高川水風も早き
大川へ飛入ける俄ふ四方より曇り
やうりしなる風の音やし共ふあふこれ
つがるもさる水も清無二又此うたの
ち地やいあると日高川を
難ふく候もさる有振の悲なり





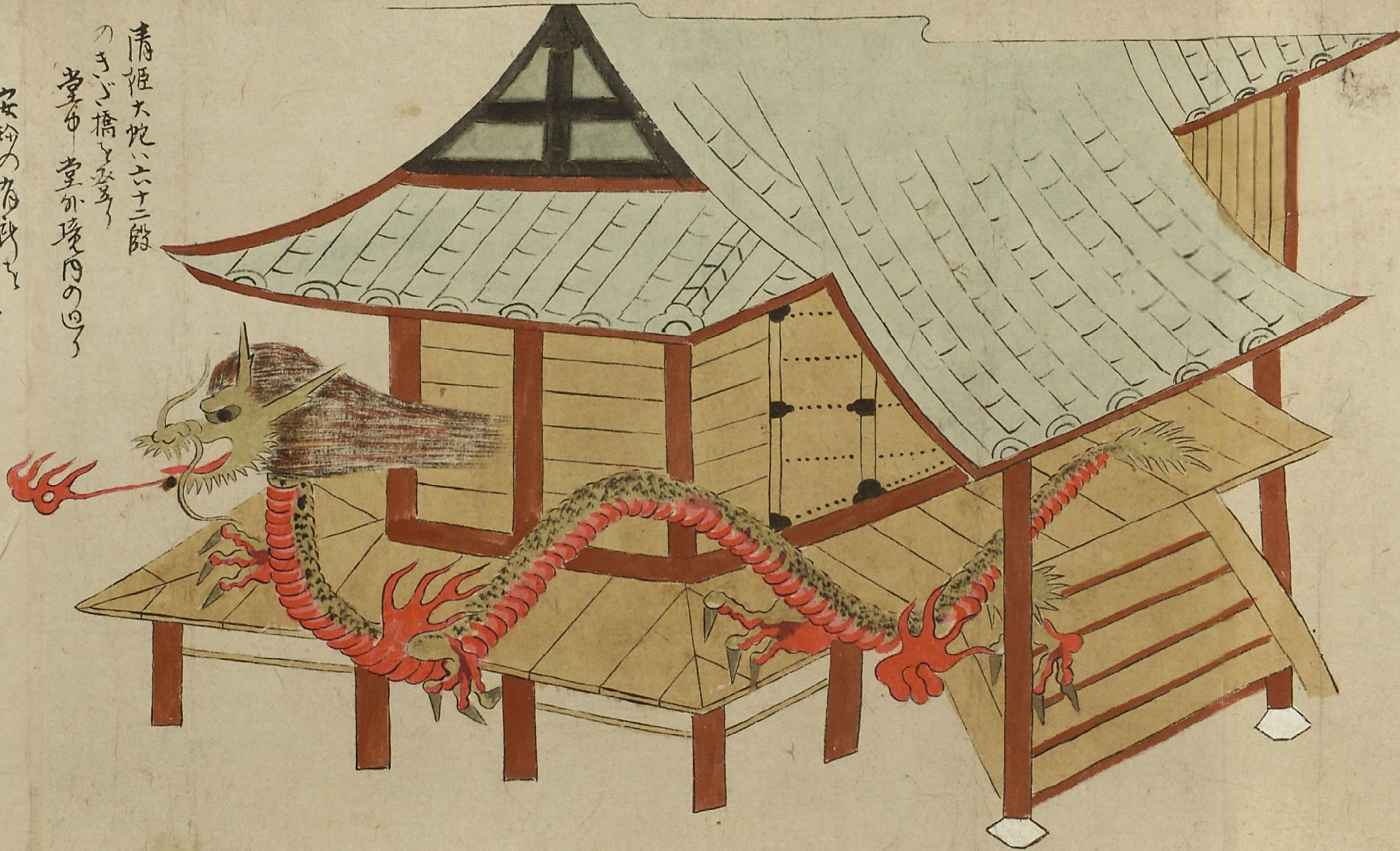
去程子安称ハ道成寺へ至リ住持ニ
對面一清姫の妻細物語りの上
何卒申ゆけ下されや一涙たれ流し
了頼りけれバ住持も不便と思ひ傳侶
連ハ此事相談ふ及ぶ然此の悪人降伏の爲や
鐘鐘とあり一此の安称とあると云ける





清姫大蛇は六十二段
のきざ橋を渡る
堂外境内の回廊

安珍の者成り
たがぬ



扱又教寺の僧侶達ハ若シ清純道來リある
 多ぶり物事一々日此んや今有くや侍けら
 俄のふ四方更雲起る悪風さつや吹集り砂煙を
 たてつたれ果多きとん此は是二又立立人の大地多
 僧侶達一自てるさし蛇の子をちるに如く何處
 やゆある世入た

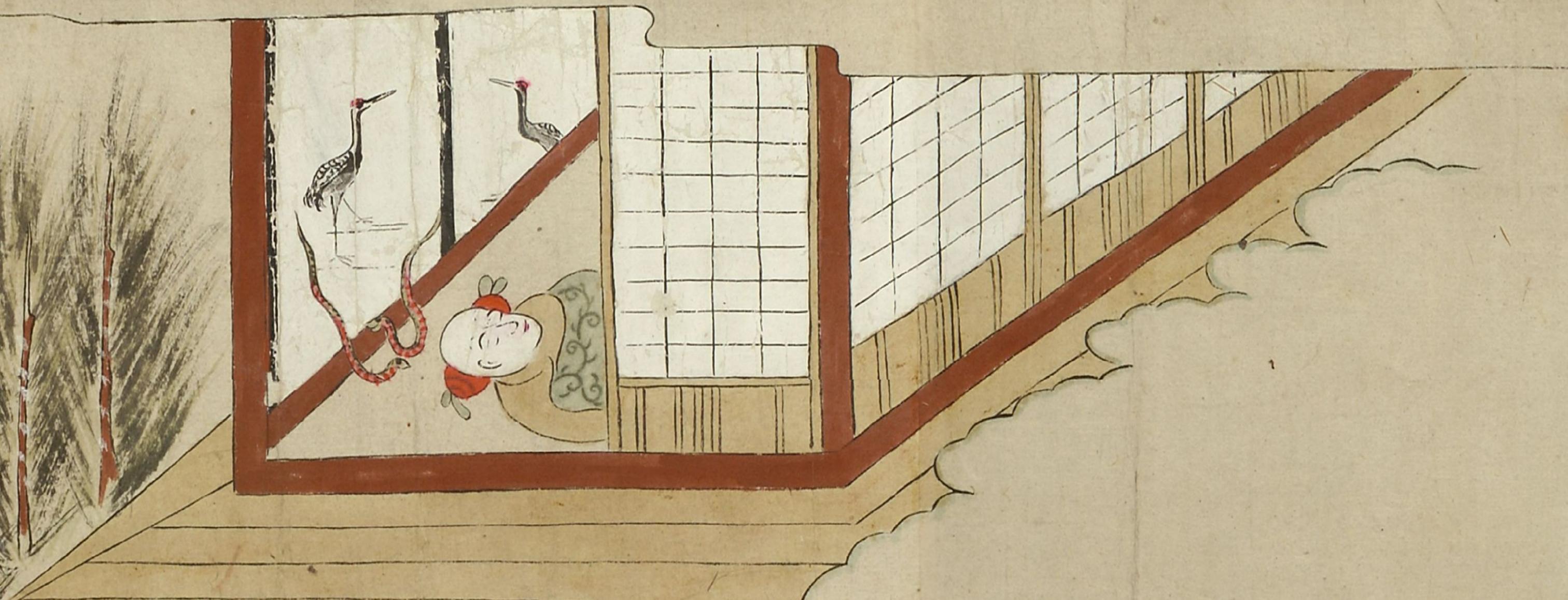


夫より清姫ち如いさ千二段のまご橋をたぎり後舟の回
 ち舟中堂か鼻を以てうめししうめししうめししうめし
 ざれをまごりしうめししうめししうめししうめし
 してうめししうめししうめししうめししうめし
 してうめししうめししうめししうめししうめし
 斯の釣鐘をいさくや七まをよまを
 尾を以て鐘をうめししうめししうめししうめし
 忽ち釣鐘一端の火やまう大蛇
 斬りしうめししうめししうめししうめししうめし
 と下り西の入江うめししうめししうめししうめし



相夫より僧侶達へやせ島の西瓜の如き、泥子碎なる
蛙の如き、しりしりやあゝこれソで鐘楼學ぶ集りて、
倒り鐘も水もさけこゝろ退るるれバ憐むべー安珍は強人ヤ
元三法師と云き天如くは五佛の骨のこ残りけりけり
壯人の僧侶達思ひん涙を流し
異乃同者ふ南無阿弥陀佛
の聲身動さず止ざり
けり





其後或は住持の
 夢よりへあるに我は
 毒人毒草の罪深き
 故少蛇ありき其が
 苦しきと受るなり

あはれ馬鹿悲しふ由
 希しいと受地道の
 苦しきとわがれた
 志や思へば住持の

夢よりあるなり



扱道成寺より八幡山乃
 向ふ大蛇入りて死
 たり跡ふ蛇塚云々
 柳の木を柱残り一皆

其後道成寺に鐘
 を鍍りて是尺必とん
 成就せんやと云
 成氏に醍醐天皇の
 所守延長三年子
 八月ノ事也

